

校番	050	ホームルーム活動	生徒会活動	<input type="radio"/>	学校行事	別紙様式
----	-----	----------	-------	-----------------------	------	------

平成30年度生徒指導集中対策及び生徒指導実践指定校「特別活動の取組事例」

学校名	河内高等学校	校長	栗田 正弘	生徒指導主事	川原 栄治
-----	--------	----	-------	--------	-------

取組事例名 『全校写真コンテスト』

取組における育てたい資質・能力

人間関係形成		社会参画		自己実現	
「他者理解・共感力」	1	「課題発見・解決力」	3	「自己理解・表現力」	2

取組のねらい『伝える力・受け取る力』

自分の気持ちを伝えることができ、人の気持ちを感じ取ることができれば、望ましい人間関係を築くことが容易になる。そのため『伝える力・受け取る力』を様々な機会を通じて育み、他者を受け入れ尊重する態度を養うことにより、よりよく生きる力を身につける。

取組の具体的内容『表現する・感じ取る』

今年度は「百花繚乱～花は散れどもさらに咲く～」という文化祭のテーマに向けて、生徒一人一人が写真を撮影し、作品にタイトルをつけて文化祭当日に展示した。展示を見た人の反応も考慮に入れながら、校内選考委員会によって受賞作品を決め、文化祭閉会式において優秀作品の表彰を行った。

取組の課題・創意工夫『見る側を意識して表現する』

コンテスト前に写真教室を開き、技術的な指導に加え、『伝えたいことを表現するにはどうすればよいか』を生徒に考えさせ、見る側が感じとってくれて初めて『伝わる』が成立するのだから、『見る側を意識して表現する』ように指導した。

コンテストの要項に、人を中傷するもの、いたずらやいじめにつながるもの、肖像権やプライバシーを侵害するものや他者が撮影したものを出品してはいけないという注意事項を記し、丁寧に説明した。

提出方法は、写真のデータが入ったメディアを学校へ持参する方法と、写真のデータをメールに添付して河内高校のアドレスに送る方法のどちらかとしたが、ほとんどの生徒はメールで提出した。作品は2L版に印刷しそれぞれを額に入れて、最も人通りの多いところにクラスごとにパネル展示した。表彰を行う際にはパワーポイントを用いて受賞作品をスクリーンに映し出して紹介した。

取組の成果（効果）『他者理解』

本校では特別支援の視点から、『生徒に伝わらないことがあれば、それは生徒の側の問題ではなく、上手く伝えることができていない教員側に問題があるのではないか。』という基本認識に立ち「伝える」ことを意識して授業や指導を行っている。そして、できていることを認めてほめることや、否定的な表現を使わず、「〇〇すれば〇〇できる」といった肯定的な表現を使うなど多くの取組を継続的に行っている。また、写真コンテストだけでなく写生大会（1年生）や短歌コンテストなど自己表現の場と表彰される機会を多く設け自己肯定感の醸成と、他者を認め、容認する心の育成へとつなげている。

そういった学校全体の取組が背景にあって、コンテストに出品された作品の中に、人を中傷するものやいたずらやいじめにつながるものなどは一切なかった。文化祭当日、展示された作品に関して、自分と異なる視点に驚く声や、称賛する声があちこちで聞かれた。よくトラブルを起こす生徒にありがちな、自分と異なるものを否定したり非難したりする姿は全く見られなかった。

生徒はこの取組を通じて、人の感性に触れることに喜びを感じたり、伝えることの難しさを実感したりすると共に、受け取る側が正しく受け取ってくれて初めて「伝わる」のだというコミュニケーションの基本的なことを実感することができたと思われる。

生徒指導部が実施している生活満足度アンケートにおいて、学校生活に満足しているかという問いに肯定的な回答をしている生徒の割合（1・2年生）は、H27年度 70.8% H28年度 77.3% H29年度 80.0% H30年度 82.1%と増加している。

大賞「運命」



優秀賞「ゆうひ」



優秀賞「夕方」



今後の展開『主体的な深い学びへ』

今回は、生徒にも受賞作品の選考に関わらせ、また、コンテスト終了後に良かったと思う作品とその理由をグループ内で話し合い、それぞれの感想を共有する時間を設けることにより、取組の効果を高めたい。

また、6回目を迎えた全校写真コンテストだが、実施時期や内容を生徒に決めさせるなど、生徒が主体的に行うコンテストへと取組を深化させていく必要がある。

他教科との関わり『対話的・協働的な学び』

すでに述べたように、本校では全ての教育活動において教職員自らが『伝える』ことを意識して取り組んでおり、各教科のグループワーク等による協働的な学びの場においても生徒に対して、伝えることを意識して考えをまとめ、相手の意見をできるだけ正確に理解し、異なる意見を尊重するよう、積極的な姿勢で取組に参加するよう指導している。